
報 告

[立教大学経済学部 歴史部会ワークショップ]

貨幣考古学と経済史研究

—— これまでの研究生活を振り返って ——

櫻 木 晋 一[†]

日 時：2020年11月13日（金） 午後2時～午後5時

会 場：オンライン開催（Zoom 利用）

報告者：櫻木 晋一（朝日大学／下関市立大学名誉教授）

参加者：須永 徳武（立教大学経済学部教授）

林 采成（立教大学経済学部教授）

岡部 桂史（立教大学経済学部教授）

湊 照宏（立教大学経済学部教授）

三宅 俊彦（淑徳大学人文学部教授）

古澤 義久（福岡大学人文学部准教授）

司 会：菊池 雄太（立教大学経済学部准教授）

菊池 皆さま、本日はお集まりいただきありがとうございました。司会を務めます立教大学経済学部の菊池雄太です。今回は、下関市立大学名誉教授で現在は朝日大学教授として教鞭をとられている櫻木晋一先生にご報告いただきます。櫻木先生は、「貨幣考古学」という研究分野の草分け的な存在です。私は西洋史学のある科研費研究課題の共同研究者として、先生と知己を得ました。科研費のプロジェクト期間が終了した際に、先生は「あとは次の世代に任せます」とおっしゃっていました。そこで、「次の世代への継承」という目的のもと、先生の研究の軌跡、さらに貨幣考古学という学問分野についてお話いただこうと、3回にわたるワークショップを企画しました。今回はその最初で、とくに先生の研究のバックグラウンドを振り返りながら、貨幣考古学という研究の特徴、研究の仕方などについて具体的にお話しいたします。それでは櫻木先生、ご報告をお願いします。

[†] 朝日大学経営学部教授・下関市立大学名誉教授

研究の軌跡——貨幣考古学という研究分野——

櫻木 どうもありがとうございます。ご紹介いただきました櫻木と申します。私は情報機器の取り扱いが元々不得手で、Zoom を使ってワークショップをやるなど、昨年までは想像だにしていなかったのですが、今回は皆さま方のご助力を得ながら話を進めていきたいと思います。

菊池先生から二人の出会いを紹介していただきましたが、日本史の私が西洋史の科研メンバーに入った理由は、西洋史の貨幣史研究はかなり難しい、避けられている分野であると認識していたからです。私は常々西洋を中心とした海外の貨幣史を専門とする先生方と協力しながら、世界的な視野で研究を深めていきたいと思っていたのですが、結果的には日本のことをやり続けてきました。そこへ、熊本大学の鶴島博和先生から「西洋史分野の科研だけど、日本の貨幣考古学をあなたが引っ張っているようだから加わって欲しい」と、科研申請時に頼まれたという経緯があります。そして、私の定年3年前に新規の西洋史科研がスタートし、この3月でその科研は終わりましたが、若い先生方を中心に西洋貨幣の研究を続けるとのことだったので、私も協力するというお話しです。

私は1953年生まれで、もう67歳になってしまいました。現在は、朝日大学経営学部で教壇に立っております。

まず、今日の論題に関わることからお話したいと思います。私の単著2冊には、タイトルに「貨幣考古学」が入っています。実際に「貨幣考古学」というキーワードで検索すると、私しか出てこないと思いますが、これは私がつくった造語に近いものであるとご理解いただいて結構だと思います。最初に出版した『貨幣考古学序説』が2009年、それまで書いていたさまざまな論文などをまとめ、これで博士（史学）の学位を取得しました。また、埋蔵文化財の発掘担当者のハンドブックとなる出土貨幣に関する本を書いて欲しいという要望があり、2016年に『貨幣考古学の世界』を出版しました。

そして、『貨幣考古学序説』の「刊行によせて」は、皆さんもご存知の森本芳樹先生に書いていただきました。私の恩師である鈴木公雄先生が亡くなられ、単著を出すに当たって最初の部分をお願いできるのは森本先生しかいないと考え、直に頼みに行くと、快く引き受けてくださり、この2ページを書いていただきました。ここに記されているように、私と森本先生との出会いは社会経済史学会の九州部会でした。知り合った当時、私にとって考古学の師である鈴木公雄先生が出土銭貨の分析による経済史研究を試みられていたのですが、その成果が社会経済史学会でかなり反響を呼んで、森本先生もその研究に注目されていました。そして、森本先生は私を鈴木先生の「九州探題」と位置付けておられます。鈴木先生が六道銭や備蓄銭と当時言われていた資料をデータ化されており、「櫻木、君は九州のデータを集めてくれ」と頼まれたので、私が資料収集を一所懸命していた活動を、森本先生は「九州探題」と表現されていま

す。森本先生は西洋中世初期経済史の世界的な研究者ですからご存知ない方はないと思いますが、西洋の貨幣に関する古銭学、あるいはその方法論などを研究しておられたので、二人は貨幣というキーワードで結びついた訳です。また、この中に、古銭を「史料論の展開のうちで人間生活のあらゆる痕跡を史料として利用しよう」と表現されています。ここに「史料論」とありますが、私が四半世紀前に帝京の短大から下関市立大学に移った時に、岩波講座の別巻3「史料論」が刊行されました。私の理解では、この時代から「史料論」が明確に歴史学研究者の中で意識されだしてきたように思います。使用する用語の問題では、森本先生は論文の中で「埋蔵貨」「個別発見貨」という言葉を使って西洋の研究を紹介されていますが、私は hoard を「一括出土銭」、single-find を「個別出土銭」と呼んでいます。若干日本語の違いはあるものの、ともかく hoard という大量にまとまって出土する貨幣と、遺跡を発掘しているとぼろりぼろりと出てくる single-find を系統的に収集することで何か研究ができないかと私は考えていたので、森本先生も同じ関心を持っておられた訳です。

そして、私は2001年4月からケンブリッジ大学に留学することになるのですが、1年間の留学が決まった時、こういう研究をやるにはどこへ行ったらいいのかを、まず森本先生に相談しました。そうしたら森本先生が「マーク・ブラックバーン Mark Blackburn という研究者を紹介するのでケンブリッジに行け」と言われたのです（写真1）。この留学によって、私の研究生活が飛躍的に発展することになるいろいろな展開が起きました。菊池先生や今日お会いし



写真1 Mark Blackburn
(1953-2011)

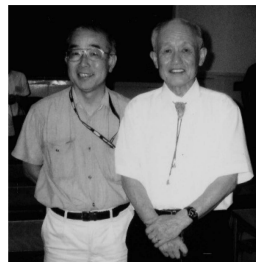


写真3 森本芳樹先生
(1934-2012)



写真2 鈴木公雄先生
(1938-2004)



写真4 Philip Grierson
(1910-2006)

ている先生方との出会いもそうですが、さまざまな出会いを大事にすることで、それからの研究がお互いにとってよいものになるという思いがあります。森本先生の引き合わせによって、2011年にマークが亡くなるまで私は彼と強い友情関係を保ちながら研究を続けてきました。それについては後ほど紹介します。

鈴木先生は66歳で亡くなりましたが、私とその出土銭貨の研究を引き継いでおり、森本先生には国際比較研究という部分をオリジナルなものとして評価していただきました。鈴木先生の追悼シンポジウムを2005年に福岡市で行った際、参加してくれたマークの英語論文は森本先生によって翻訳され、報告集に載っています。また、私が編集していた雑誌『出土銭貨』の追悼号にも森本先生は論文を寄稿してくださいました。

そして「刊行によせて」最後のパラグラフで、「体系的に語れていないなど多くの批判が向けられるだろう」とマイルドに表現されていますが、これは森本先生の私に対する厳しいお言葉です。今日の話でも体験的ですが、森本先生はストレートに非難するのではなく、こういう書き方をされています。しかしそうであっても、私がもう少し頑張っ、この分野を学問の一分野として確立しなければならないという思いがあり、語っております。

私の研究はイギリスからベトナムに視点を移すことになります。三宅俊彦さんが2006年にベトナムの出土銭調査を始め、私は応援に行きました。ですから、日本史が専門と言いながらイギリスに留学し、ベトナム調査に行くなど、本当にわけのわからないことをやっているのが櫻木であるご理解ください。私の専門は日本貨幣史ですが、最近では貨幣考古学と言っています。経済学部にも所属していたので、考古学ではまずいだろうという思いもあり、現在も経営学部におりますが、専門は専門として許されるはずで

私の研究者としての出発点は、大牟田にある九州帝京短期大学の専任教員で9年間勤めました。ここで、後に立教大学に移られる老川慶喜さんと2年間一緒だった時期があり、立教とはそこでつながったわけです。私は大学・大学院時代を東京で過ごし、九州に戻ったら研究面でハンディキャップがあるので、九州にいても人に負けない研究をしなければいけないと考えました。そこに鈴木先生から九州各地で出土していた六道銭や一括出土銭などのデータが欲しいと言われたので、九州をフィールドとする研究を始めたわけです。鈴木先生は日本全国の出土銭データをまとめ、東京大学出版会から『出土銭貨の研究』を出されて学位を取られ、私はそのための九州探題として頑張ったということです。

次は銭貨の流通問題ですが、こうなると少し経済史的になると思います。九州で調査をしていると、関東と関西、あるいは東北などとは流通していた貨幣が違うのではないかと感じていました。「東の永楽、西のびた」と言われますが、集めたデータを細かく見ると、さらに細分できることに気がついたのです。これについては次回に詳しい話をさせていただきたいと思います。

また、貨幣は金属製なので、どうしても技術的な問題がからんできます。そこで金属組成の

分析や、鋳型などの研究も始めました。貨幣研究のために、自然科学的な分野に踏み込まざるをえなくなったというのが実情です。

そしてケンブリッジ大学では、国際的な比較研究の重要性を痛感しました。四角い穴の開いた丸いお金を我々は「錢貨」と呼んでいますが、私はこの錢貨がどの地域まで広範に流通していたのかという問題意識をもっていたので、ベトナムに9回、ラオスへは3回調査に行きました。ベトナムまでは間違いなく浸透していますので、その先はどうかを調べるにはラオス、あるいはタイだと考えたのです。結論から言えば、ラオスはタイの銀貨経済圏の影響をかなり受けていることを確認しました。

私の国内調査の事例を簡単に紹介します。黒木町は現在の八女市で福岡県の山中にあり、ここでは洪武通宝だけを99%集めて壺の中に入れた一括錢が出土しており、特定の錢種だけを集めた非常に特殊なものです。これが研究の初期に出会った資料だったので、私はのめり込みました。仲原は福岡市の近郊である糟屋郡の一括出土錢で、確か80年以上前に出土して、ずっと博物館の収蔵庫に保管されていたものです。地元の久山町から町の歴史教育の一環として調査に協力して欲しいと頼まれ、8年ほど前だったと思いますが、九州国立博物館に収蔵されていた全点の調査をしました。そして最近の調査が、山口県岩国市の中津居館跡で発掘された一括出土錢です。発掘調査では一括出土錢にはなかなか巡り会えないのですが、私が下関市立大学にいた関係で、すぐに発見の一報がありました。私は当時、学部長だったのですが、申し訳ないけど会議はそっちのけですっ飛んでいきました。私は調査指導という形でこの遺物に関わり、非常に重要な遺物なので現状のままで残すべきだと進言し、現在はクリーニング作業を施した上で展示されています。これについても次回に紹介します。

先ほど菊池先生の紹介にあった科研代表者の鶴島先生が熊本に住んでおり、科研の採択直後に震災が起きました。砥川古錢は最新の調査事例で、益城町の土蔵に人知れず眠っていた大量の寛永通宝が、震災を契機に発見されたのです。この種の調査ができるのは私しかおらず、分類整理を行い、その結果を科研報告書に載せていますが、大半は江戸時代の寛永通宝でした。近世になると文献史料も多くなるので、考古資料としての寛永通宝は軽んじられる傾向にありますが、これ幸いと初めてチャレンジしました。

次に、海外の博物館資料に関しては、私がケンブリッジに留学したことでヨーロッパ内の人的ネットワークができました。イギリス大英博物館の出版局から日本貨幣カタログを出すことができたことはこの成果で、私にとっては非常に名誉なことだと思っています。ケンブリッジ大学フィッツウィリアム博物館、オックスフォード大学アシュモリアン博物館の日本貨幣も私が整理しました。フランスでは、Bibliothèque nationale de France（国立図書館）の所蔵データも作っていますが、まだ公表していません。ドイツではイェナ大学に行き、スウェーデンでは王立貨幣博物館の日本貨幣をデータ化しました。現在進行形のものでは、コペンハーゲンにあるデンマーク国立博物館所蔵のブラムセンコレクションの整理がほぼ終わっています。彼は

明治初期に電信技術者として来日し、31歳の若さで亡くなったのですが、日本の古銭を収集していたのです。その良好なコレクションが博物館の片隅に眠っているので、これを明らかにすることで彼の遺志を蘇らせたいと思っています。2021年にはカタログとして出版する予定で、これについては日本学士院から補助金をもらっており、本当は早くコペンハーゲンに行きたいのですが、こういうコロナ禍の状況なので今はペンディングになっています。

ベトナムのハティン省はハノイより少し南にある省ですが、三宅さんと通って、去年はクリスマスの日にハティン省文化体育観光局で国際セミナーもやりました。木浦の海洋博物館は林先生も関係あるかもしれませんが、韓国の博物館です。ここの新安沈船は、1323年に中国の寧波から博多、京都に向かっていて船が何らかの原因で沈没し、木浦沖に漂着したものです。その遺物を海軍が引き揚げ、ソウル中央博物館や木浦の海洋博物館に展示されています。これには28トンもの膨大な量の銭貨が積まれており、木浦の海洋博物館が主催した2007年の国際シンポジウムでは、銭貨について私が報告しました。宮崎県立総合博物館でも調査を行いました。

最近はディープラーニングを使用した画像認識が話題になっていますが、顔認証ができるなら貨幣の認証もできるだろうと考え、その分野の専門家と共同研究をしています。私が「貨幣のここを判別したいんだ」とリクエストすると、彼がその作業をしてくれ、3年かけて1本の論文を書き上げました。今はもっと精度を上げる研究に取り組んでいます。

残留地磁気年代測定法というのは、銭貨については実用化がまだできていません。溶けた銅が固まるときにわずかながら地磁気が残るのだそうです。地球は磁石なのでNとSが向き合うわけで、銭貨の鋳型は地面に垂直に立てて設置するので、「東経〇度北緯〇度でいつつくられた」ということがわかるのだそうです。これはすごく興味深いと思って、富山大学の先生と組んでやろうとしているところです。ただ、先方の研究対象は銭貨以外にもあるのでなかなか進展しないのですが、私が生きている間にはこの研究をひとかどのものにしたいと思っています。

「銭譜」は江戸時代からある貨幣のカタログで、その世界にも踏み込まねばならないと私は思っています。ただ難しいのは、古銭を売ったり買ったりという世界ですから、マニアの世界では現実のお金がからんできます。研究者としてあまり踏み込むべき分野ではなく、鈴木先生は生前「収集の世界に関わってはだめだ」と言われていましたが、古銭家の研究蓄積を完全に無視するわけにもいかないというのが私のスタンスです。

私は貨幣考古学を「Numismatic Archaeology」と英訳しています。これはケンブリッジ大学の先生と、どの表現が適切かを検討した結果なので、ほかの言葉に変える気はありません。「貨幣を研究対象とした考古学の一分野で、文献史学、文化財科学などの諸学問との学融合によって人間社会の中で機能した貨幣の実態を明らかにする学問」と定義していますので、今日お聞きの方から、こんな内容を入れたらもっと学問としてふくよかになるよといったアドバイスがあれば受けたいと思います。これまでも歴史学は文献史学と考古学が両輪であると

よく言われてきましたが、それに文化財科学という柱を加えました。さらにもっと深い意味を持たせ、日本だけでなく世界でもこれが学問の一分野となるようにとの思いを込めて、この訳語にしました。私がこの言葉を最初に使ったのは朝日新聞のコラムで、その結びの部分で「学問として産声をあげようとしている今日この頃である」としており、2006年当時の私のワクワクした気持ちが表われています。したがって、私はこの頃から「貨幣考古学」という言葉を頭に置きながら研究を続けてきたとご理解ください。

私の研究のスタートは古代共同体論です。マルクスが『経済学批判』の序言に「アジア的生産様式」と書いているのですが、私はこれについて研究していました。理論的なことだけでなく、日本における共同体の変遷を実証的に研究することが必要だと考えた結果、資料を見ることができるよう考古学を始めたのです。そして、原始共同体と呼ばれるものから共同体がどのように変遷していくかを研究しましたが、今の私にとっては興味のある分野ではなくなりました。森本先生が「物質資料」と書かれ、私は「モノ資料」という言い方をしますが、文献史料と同じように考古資料は重要であり、考古資料を使った経済史研究を40数年前からやっています。当時は、通常の経済史研究者なら経営史との両輪なのですが、櫻木は経済史と考古学の両輪でやっている変なやつだと言われていました。それでもオリジナリティ、つまり私にしかできないことがあると思いつづけてやってきました。私のゼミ卒業生によると、私の口癖は「オリジナリティ」で、学生に対しても「君の研究にはオリジナリティがない」とよく言っていたそうです。この四半世紀でようやく「史料論」が認知されてきたと私は思っています。

恩師の鈴木公雄先生は慶應義塾大学を定年直後の2006年に前立腺がんで亡くなられました(写真2)。若い人はもうご存知ないかもしれませんが、考古学者の鈴木先生は六道銭のセリエーション分析で当時是一世を風靡されました。墓に副葬された基本的に6枚の六道銭の種類を観察すると、時代によって少しずつ違っている。その組み合わせから徳川幕府の銭貨政策がわかるという、経済史研究者にとっては驚くべき研究だったのです。徳川幕府は1636年に寛永通宝を発行しますが、それ以前は中国からの渡来銭、および日本や中国で私鑄された銭貨が状態の悪いものも含めて混ざって流通していたので、それらの回収を始めます。つまり、自ら発行した寛永通宝との切り替え速度はどうであったのかという疑問に対し、速やかに切り替えたという結論を考古学的なモノ資料から明らかにしたことが経済史への貢献でした。

社会経済史学会全国大会に考古学者の鈴木先生がみえていたので、私が「先生、何をしに来たのですか」と尋ねたら、「六道銭に関する発表だよ」と答えられたことを忘れられません。それが運の尽きで、私もその研究に組み込まれることになってしまったのです。櫻木が貨幣研究を始めた理由は、鈴木先生から「やれ」と言われたからで、崇高な問題意識を持っていたということではないのです。鈴木先生は東京に住んでおられ、当時は土地開発が盛んで大規模な発掘調査が行われていました。例えばマンションが建つとなると事前調査が必要なのです。これは裏話なのですが、先生のご自宅に札束を持った業者が「早く調査を終わらせてくれ」と押

しかけてくる。当然、追いついたとのことでしたが、そんな時代でした。調査区域に近世墓があると六道銭資料がどんどん増え、それを使った研究を始められたということです。人骨の横には銭貨があり、あまり触りたくもない六道銭を丹念に観察・分析し、経済史研究に活かそうとするのですから、鈴木先生はただものではありません。さらに鈴木先生は、考古資料による研究だけでなく、宿場史料による裏づけを行ったのです。東海道の宿場史料における銭貨や金貨の配布・回収に関する記録を、同僚の中井信彦先生にアドバイスを受けて総合的に研究されました。つまり、単なる考古学者ではなかったのです。

これと並行して先生は備蓄銭研究をしておられました。私が一括出土銭と呼んでいるものですが、一応1,000枚以上のものをそう呼んでいます。私はそこまで大量でなくてもいいと思っていますので、あやふやな言い方で「大量」と言いますが、目安としては一貫文以上ということです。六道銭は中世から近世の資料です。近世に最盛期を迎えるので、鈴木先生は江戸幕府の銭貨政策を解明するため六道銭に注目されたのですが、中世という時代を貨幣で見るとはできないかと考えた時、備蓄銭に行きつくわけでした。これは考古学者の中では昔から研究されていた目につく資料なので、それを次々とデータ化されていきました。銭種別に見ると出土第1位が皇宋通宝、第2位が元豊通宝となります。昔のことですからパソコンの性能も低く、先生が言われた笑い話は、風呂に入る前にデータを入れて始動させると、風呂からあがったくらいでやっと結果が出てくる。そういう時代でした。それでも、先生はパソコンを使いながら大量のデータを処理されていました。

そして、古代については出土皇朝十二銭のデータベース化が必要だと考え、2000年7月に鈴木先生が会長だった出土銭貨研究会でその集成をして報告書を発行しました。これは今でも貴重な資料になっており、先生は「個別出土銭」という言葉は使われなかったものの、個別で出土した銭貨をデータベース化されたので、個別出土銭研究の嚆矢です。

これを受けて私は貨幣考古学という分野を打ち立てていくことになります。先生が『出土銭貨の研究』を出版されたので、同じ研究テーマでは学位をもらうことができないと考えた結果、はたとひらめいたのが貨幣考古学でした。それには特に海外に留学したことが大きかった。それから文化財科学の手法を取り入れたことです。

鉛同位体比分析について少しお話しておきます。中世末～近世初頭の日本では鉛がほとんど生産されておらず、これは意外と盲点なのです。古代にはたくさん採っていたのですが、ある時期に途絶えてしまうのです。しかし鉄砲の導入は、弾の原料として大量の鉛が必要になるので、どこの鉛を使ったかという点で鉛同位体比分析が脚光を浴びるようになりました。鉛には4つの同位体があって、その比率によってどこの鉱脈かがだいたいわかる金属です。これまでは日本と朝鮮半島、中国の華南といった鉛産地の区分はできていたのですが、その範囲に収まらない「N領域」と呼ばれるところに位置する鉛がたくさん日本で出土していたのです(図1)。

これは未解明のまま20年ほど経過し、やっと数年前にタイのソントー鉱山産の鉛であること

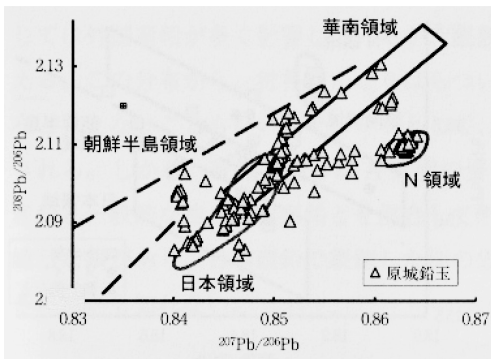


図1 長崎県原城跡から出土した鉛玉の鉛同位体比(A式図)

(出典) 平尾良光ほか編『大航海時代の日本と金属交易』(思文閣出版 2014)61頁より

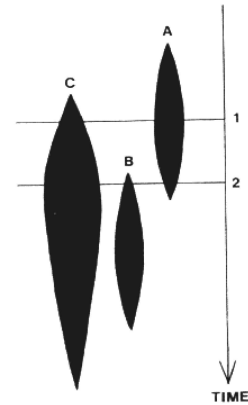


図2 セリエーション図

(出典) 鈴木公雄(1999)『出土銭貨の研究』
東京大学出版会、130頁より

が突き止められたのです。私もかつて、原城の落城面から5 cmくらいの塊である鉛のインゴットが出土していたので、発掘担当者に「このインゴットは非常に重要な資料だから貸してくれ」と頼み込み、鉛同位体比分析を実施しました。結果はN領域の鉛で、今日ではタイ産鉛が朱印船貿易や南蛮貿易によってもたらされたものと考えられます。これで個人的には20年来の疑問が解消しました。

私は九州の福岡に住んでいたのも、幸いにも博多遺跡群という中世を代表する国際貿易都市とその隣に箱崎遺跡群があります。これからさらに調査が進むと思いますが、中世の博多と箱崎は双子の町だったのです。博多については40年くらい前の地下鉄工事以来、発掘調査が続いており、当時の様子がずいぶんわかってきました。私は出土銭貨に関しては全部観察しており、岩波書店の『貨幣の地域史』でその分析結果を示しています。

1993年には鈴木先生らと出土銭貨研究会をつくりました。またこれとは別に、鈴木先生と松山大学の岩橋勝先生が東西の代表である貨幣史研究会をつくり、貨幣史研究会が2つあったのです。東は日本銀行を会場に、西は甲南大学を拠点にしながら岩橋先生が中心となって活動し20年以上が経ちました。私はその両方に加わって、いろいろな研究者と交わることができました。鈴木先生が亡くなられた後、東日本部会は残念ながらなくなりましたが、今では西の貨幣史研究会が全国組織となり、2021年に皆で本を出版する予定です。

私は森本先生のおかげでケンブリッジ大学に留学ができ、研究がうまく運びました。この写

真は、森本先生が九州を離れられる前に写した最後の講義時のツーショットです（写真3）。結局、これがお会いする最後になってしまい、ご葬儀には伺いましたが、もっと生きていて欲しかった。私は、自分が生きている以上は後進にいろいろなことを伝えていかなければいけないと考えています。マークが2011年にがんで亡くなった時には、追悼集会に参加のためイギリスまで行きました。『ヌミスマティックス』というオックスフォード大学出版会から出ている有名な本の著者フィリップ・グリアソンは、私が留学した時にはまだご健在だったのでツーショットを撮らせていただきました（写真4）。これは私にとっては宝物です。いろいろな先生方と知り合い、いろいろな研究の場を与えられ、今日の櫻木があります。

質疑応答（1）

菊池 ありがとうございます。お話の途中ですが、ここまでが一区切りということになります。当時の学界の状況を振り返りながらさまざまなお話をいただいて、司会の私自身お聞きしたいことがたくさんあるのですが、皆さん何か質問はございますか。私から質問してよろしいでしょうか。

特に森本先生と一緒にやられていろいろな刺激や影響を受けられたということでした。森本先生は西洋経済史で知らない人はおらず、中世西洋経済史のカリスマ的な存在で、九州を中心に「森本学派」と呼ばれるような影響力をお持ちだった先生でした。早くに亡くなられてしまったことは非常に大きな損失で、九大を中心に森本学派の研究は受け継がれてはいますが、いまの若い世代にまで継承されているかという点、難しいところもあります。とくに、西洋経済史では貨幣に手を出すのを躊躇する人が多いと思うのです。日本に住んでいると、貨幣、つまりモノを扱った研究というのがやりにくいのです。身近にありませんから。櫻木先生は先ほどすぐ近くにフィールドがあったとおっしゃっていましたが、西洋経済史ではフィールドがものすごく遠くてやれないというところがあります。

櫻木先生は森本先生の近くにいて一緒に研究されていたということでしょうか。いたいのですが、森本先生はその辺はどのように勉強されていて、なぜそういう研究ができるようになったとお考えでしょうか。櫻木先生から見て、お会いして以降の森本先生はどんな感じで研究されていたのですか。フィールドに出て調査されていたのか、それとも貨幣のヨーロッパの知見を文献的に吸収してそれを応用していったという形だったのでしょうか。

櫻木 私が森本先生と親しくお話するようになったのは、1990年の社会経済史学会全国大会松山大学で「徳川期貨幣の経済史——小額貨幣を中心として——」という特集のときからです。その時に森本先生がデナリウス貨に関する報告をされ、岩橋先生と福岡大学の藤本隆士先生が銭匁使いに関する報告をされました。その時にはすでに森本先生はかなり貨幣の研究をやっておられました。ですから、過去の研究の経緯は私にはわかりませんが、知り合った後はイギリ

スを中心として可能な限り渡欧され、奥様の朝子さんと一緒に文献を中心に勉強されていたように思います。ただ、ケンブリッジに滞在されていた時にはマーク・ブラックバーンとの関係でフィッツウィリアム博物館に出入りされていたようですが、モノ資料を丹念に見るということではなく、いろいろな文献を丹念に読み込まれ、問題意識を持たれたのだと思います。ご承知の通り森本先生は語学力に長けた方で、発音はともかくとしていろいろな言語を操られておりましたので、可能な限り原典に当たって勉強しておられたように思います。

菊池 ありがとうございます。私も興味がありながら手を出せないというか、ちょっとずつ勉強しながら、もしそれを研究に使うとしたらどのようにすればよいのかということを考えています。森本先生の時代と今では触れられる情報に少し違いがあるのかなと思っていて、例えばフィールドに出て調査するとなると今も変わらず難しさはあると思うのですがデータベースなどはそろっているのかなと思いますので、できそうでしょうか。

櫻木 私からのアドバイスは、フィールドをやっていないからダメだと思必要はないということです。やるに越したことはないのですが、そこにエネルギーを使いすぎると本来やらなければいけないことがやれなくなります。インターネットが発達してデータベース等が容易に検索できるので、それを十分に活用すればいいと思います。ただ、モノを実際に扱えるかどうかは非常に重要な作業なので、若干の経験はあったほうがいいかなとは思いますが、自分でコレクションをする必要はなく、私は持っていません。つまり、収集するとなると、少し資料の見方が変わってくるのです。人に「貨幣を見せてください」と言われても、「僕はパソコンの中にしか持っていませんよ」と答えます。いわゆる古銭学との協業の難しいところはここなのです。現実のコインをどう観察するかは微妙な問題ですが、これ以上言うとも収集批判になるので控えます。

菊池 ありがとうございます。安心しました。私もそのようなイメージを何となく持っていたのですが、まず文献があって、それからデータベースを使うということを考えています。ただ、やはりそれだけでは足りないとも思います。以前に櫻木先生に弟子入りしたいと申し上げたのもそれが理由です。ヨーロッパで調査に加わることはなかなか難しいとしても、日本で、違いはあるにせよ現場に出て見るだけでも、だいぶ違ってくるのかなというふうに思っています。

櫻木 考古学の調査で貨幣を取り扱うだけでなく、博物館が持っている現物の貨幣をご覧になればいいと思います。ある先生から「博物館で貨幣調査をするにはどうしたらいいですか」という質問がありました。博物館では資料の整理は整然とされているので、正式に「これを見たい」とモノを指定すれば調査は容易です。ただし、個々の貨幣に付したチケットに情報が書き込まれているだけで、一覧表はない場合が多い。ケンブリッジもオックスフォードも一覧表を持っていなかったのが、私がそれをエクセルに入力したのです。そういうことなので、現物確認に行かればいいと思います。大英博物館は申請さえすれば誰にでも見せてくれます。日本

銀行の博物館は残念ながら研究者にしか見せてくれません。これにはそれなりの理由があって、貨幣のすり替えとかいろいろなことが起こるからです。

菊池 ありがとうございます。

林 私は金本位とかそういうことの知識しかなくて、貨幣そのものについてはあまり知識がなく、博物館に行ったらちょっと見て「こんな形をしているのか」と感じたりする程度ですが、貨幣を通じて経済を見るということは、経済史をやっている人間として考えるのですが、商取引が盛んに行われて、ある地域の全体的な経済の成長あるいは衰退ということが推測できれば、貨幣そのものから見られる経済史ということに話が広がるのではないかと思います。例えばそういったことが貨幣考古学からどのように説明できるもののでしょうか。教えていただければと思います。

櫻木 経済史研究者としてはその部分を説明できなければいけないと思うので、核心を突いた質問だと思います。例えば中世において、先ほどのシングルファインドですが、商行為が頻繁に行われているところほど遺失貨が多くなります。つまり、シングルファインドの量が多いところはかなり商業活動が活発であったという証拠になると考えています。

ただし、貨幣には地鎮などのマジカルな使い方もあるので、出土状況をよく観察しなければいけないのですが、シングルファインドは貨幣活性の研究につながると思います。これは経済史研究になると理解していただけるのではないのでしょうか。

また、銭貨は中央に穴が開いているのでそこに紐を通して束をつくります。我々は「緡（さし）銭」と呼んでおり、日本の中世では97枚が一般的です。これは考古学的に出土物で示せるので、当時の商いではこういう単位の貨幣使用法だったと、経営史的にもモノ資料から言えると思います。ベトナムのハノイの調査では、14世紀だったと思いますが、出土一単位は67枚でした。中国ではまったく違う単位もあるし、緡銭をテーマに中国、朝鮮半島、日本、ベトナムでは時代によってどう違うかを見ていくと、商人の活動をそこに見ることができるような気がします。ストレートには言えないのですが、断片的にはいろいろな経済、経営の活動を出土銭貨から見ることができる例として挙げました。

林 ありがとうございます。別の質問をさせていただきたいのですが、先ほど中国とか日本とかベトナムなどがあって、ヨーロッパと比較研究されるということをおっしゃったのですが、その真ん中にある南アジアたるインドというのはどういった存在でしょうか。非常に形は違うように見えても、実際にはヨーロッパと非常に近いところがあるので、貨幣から見た世界史的な境目というか、そういったことはどのように言えるでしょうか。

櫻木 インドが専門でない私にとっては難しい質問で、先ほどの鶴島科研には「西ユーラシア」、三宅科研のタイトルには「東ユーラシア」がついています。つまり、対象地域にベトナムまで含めると、ここは東南アジアですから東アジアとは言えなくなってしまうのです。なので、インドは地勢的には東西に切ったら西側に近い、つまり金貨・銀貨を中心とする経済圏だ

と思います。でも、細かく見ると南アジアはまた少し違う。日本にこの地域の研究者は少ないのですが、貨幣史研究会の中では鳥取環境大学の谷口謙次さんがインド貨幣の専門です。大きく2つに分けると、我々の穴開き銭の世界は東ユーラシア、インドはどちらかというと西ユーラシア、それでもヨーロッパとは違うのではないかと思います。

須永 1点よろしいですか。非常におもしろい話を聞かせていただいて、普段あまり聞けないようなことなので非常に興味深く聞かせていただいたのですが、櫻木先生のフィールドは、渡来銭といっても日本で出土したものを扱うわけですね。

櫻木 はい。

須永 それは非常におもしろいのですが、例えば中国や朝鮮半島。実際にフィールドでモノ史料として扱うことが大事というお話もあったので、その辺の兼ね合いでうかがいたいのですが、中国や朝鮮半島、東南アジアで櫻木先生と同じような視点で、現地の通貨を分析してアジアにおける中国銭の流通域などを研究しているような、そういう研究はアジアにありますか。

櫻木 答えを先に言うと「ない」です。まず朝鮮半島の話をする、朝鮮半島で金属貨幣が本格的に使われだしたのは17世紀の終わりからです。つまり、私のイメージでは、韓国の中世史家は金属貨幣にはあまり興味が無い。だから、新安沈船は非常に良好な資料でありながら、銭貨にはほとんど誰も注目していないという状態です。中国には古銭の収集家がたくさんいます。ただ、我々のようなスタンスで学問的にやろうとしている人は少ないと思います。私も何度か中国へ調査のために行きましたが、中国では相手にされませんでした。というのは、「どんなお金を見たいのか」と聞かれるので「宋や明代のお金」と答えると、「なぜそんなお金を見たいの?」と言われます。彼らは、2000年以上前のお金に対してはコレクターとしての興味を持っているのですが、流通貨幣として経済史的に捉えようという観点は基本的にはないと思います。ただ、我々がこういうスタイルの研究を発信しているので、将来的に研究者が出現することを期待しています。ベトナムについては、ベトナム国立大学ハノイ校の先生方と一緒に調査をしてきました。社会主義の国ですから、現地の先生方と連名でないと日本隊だけでは調査をさせてもらえないのです。実際にはこちらが科研費などを使いながら調査をやっている、先方の若い先生が我々のやっていることを見て学んで欲しいという思いです。これが現状なので、私のような研究スタンスの人間は東ユーラシアにはいないというお答えになります。

須永 ありがとうございます。

菊池 今ちょうど三宅先生がいらっしゃいました。淑徳大学の三宅俊彦先生です。櫻木先生からは、貨幣考古学の跡継ぎであるとお紹介いただいています。

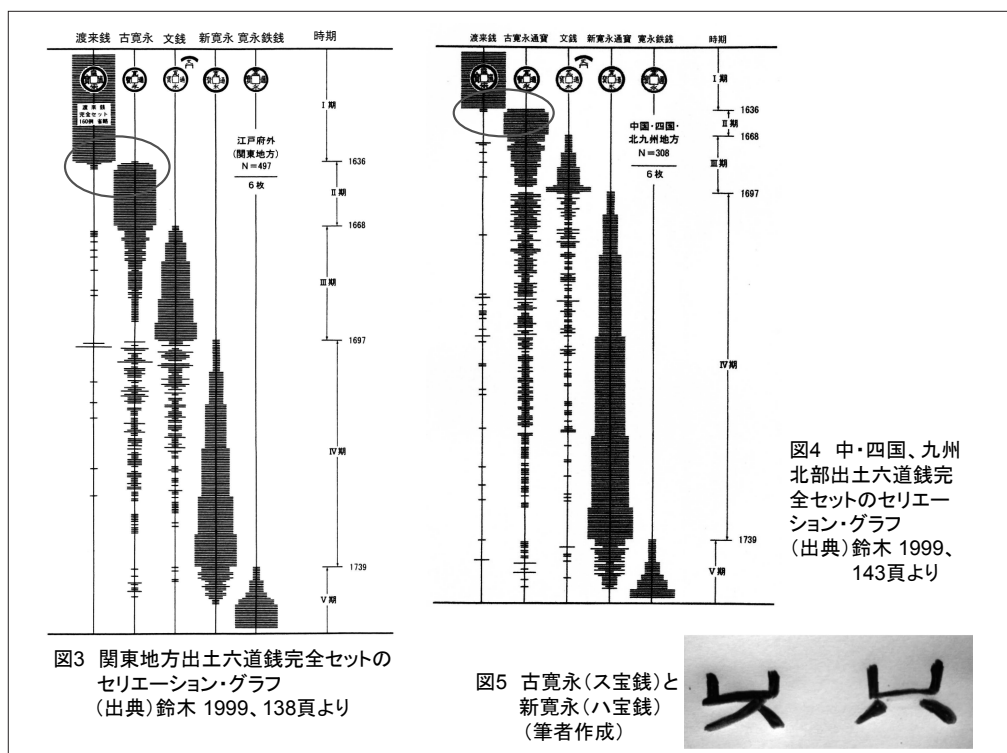
三宅 遅くなりまして申し訳ありませんでした。淑徳大学の三宅です。よろしく願いいたします。考古学を専門としていまして、出土するお金について勉強しています。今日はお誘いいただきましてありがとうございます。勉強させていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

菊池 よろしくお願ひいたします。それでは櫻木先生の報告を再開したいと思います。

出土銭からみる貨幣流通

櫻木 これからの話には三宅先生の研究も入ってきますので、あとでサポートしてください。

最初は、先ほどの鈴木先生の六道銭の研究をもう少し具体的に述べます。セリエーション図というのは縦軸に年代、上が古くて下に行くほど新しい。横軸は、左から古くて右へ行くと新しい。六道銭6枚を種類別に、渡来銭，古寛永，文銭，新寛永，寛永鉄銭と時代順に右側に配置していく。横軸の幅は合計すると同じです。これは考古学の手法の一つで，セリエーションというのは様式が漸移する時には，図2 A・B・Cのように上から見ると軍艦を上から見たような形になるのです。図3は，鈴木先生がつくられた関東地方の六道銭を並べたものですが，一番左に私が丸印を入れておいた部分はどれも形が違う。私が九州を中心に集めた資料で作ったものが図4です。丸で囲ったところを見るとより鮮明に断絶がある。これは何を意味するのか。つまり，1636年に出た寛永通宝とその前の渡来銭が漸移しないということは，その両貨幣が併存していた時期は短かったとしか考えられないのです。また，寛永通宝を細かく観察すると，図5のように古寛永は「寶」の最後の三画が「ス」に見えます。そして裏側に「文」が書かれた文銭と新寛永の「寶」は，最後の2画が開いて「ハ」に見える。一見同じようなコイン



ですが、よく観察すると時期の違いが分かるので、これで分類しようとしたのです。鈴木先生は「マニアは何10種類、何100種類と分類するけれど意味がない。このくらいみんながわかる基準で区別しないとだめだ。」と言われていました。考古学者の三宅先生も同じような考え方をされるわけで、鈴木先生は寛永通宝を鉄銭まで含めて大きく4つに分けてセリエーション図をつくったら、こういう結論になりました。つまり、徳川幕府はかなり速やかに渡来銭を回収しているということがわかったのです。

私は九州の出土銭をデータ化したのですが、永楽通宝より前の明銭である洪武通宝が多かった。鈴木先生はいつも永楽通宝の話をされていて、関東では「永高勘定」という言葉からわかるように永楽銭が多いのですが、九州ではあまりない。そこで生物学で言う「すみ分け」が起っていたのではないかとひらめいたのです。つまり、地域によって違う貨幣が流通していたのではないかということです。経済史では「東の金遣い、西の銀遣い」「東の永楽、西のびた」と東西日本が分かれています。九州は西ですが、東北でも洪武通宝が多いことにも並行して気がついており、このことから私は銭貨のすみ分けが起きていると言いました。今でも同様の傾向があり、このことは否定できないので、おそらく学界で認められているものと思います。だとすれば、私がそこには貢献したのかもしれませんが。

文献史の研究者である九州大学の佐伯弘次さんから、『毛吹草』という江戸時代初期の俳諧の本に「筑後・薩摩にころ銭」と書いてあることを教えてもらいました。研究仲間を持っているのはいいことですね。自分ではそういうものを読まないのに、確認すると確かに書いてある。そうしたら、私が言っている洪武通宝が多いことは文献にも書いてあり、江戸時代初期の人はこのことを認識していたわけです。

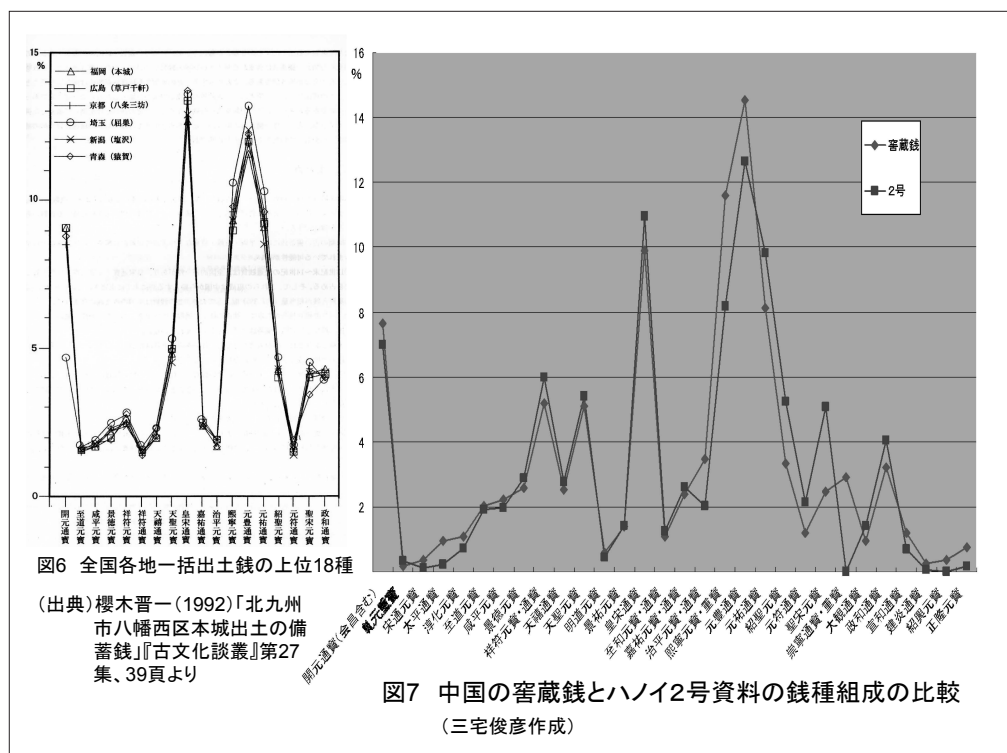
鹿児島県の加治木は始良市になっていますが、かつて島津氏がお金をつくっていた場所があるのです。早く発掘調査をしてくれないかなと網を張って待っていて、20年くらいは何も動かなかったのが、つい数年前に試掘調査が行われ、私はついているなあと思いました。来年度以降、三宅科研でこれを研究しようと考えています。また、筑後もころ銭ですから洪武が多いのです。黒木町の一括出土銭は洪武通宝ばかりと言いましたが、筑後の中心都市である久留米市の調査でも洪武通宝が多いことがわかってきました。そして、岐阜に赴任してから改めていろいろな報告書を見ると、柳川市保加町遺跡、上町遺跡の調査報告を見てぎょっとしました。ここでももっとすごい資料が出ているので、それを加えていこうと考えています。つまり、自分が今まで考えてきたことを強める新しい発掘資料が出てきたということです。洪武通宝は寛永通宝が広範に流通する直前の時期に、この地域では主体的に使われていたということが考古遺物からはっきりしてきました。もう答えは見えているので、ただ証拠を集めるだけです。ただ、報告書には出土した銭貨の全部ではなく、一部の拓本だけ載っているのが普通です。報告書には載っていないものが大量に保管箱の中に入っていますから、それらを1点1点データ化していく必要があります。県職員はそこまでのエネルギーが割けないので、私が行かなければ

いけない。三宅先生も一緒に行きましょう。

同様に、中世末に流通していた無文銭も出土する地域に偏りがあります。東北では東北中世史学会がデータ化してくれていますし、山陰については私が短大の教員時代に科研費を使って調査をしました。今では大森銀山が世界遺産になりましたが、当時は遠藤浩巳さんが一人で細々と掘っていました。この地方のいろいろな遺跡を見ていくと無文銭がけっこう出土しているので、直感的に鉾山町のようなところで無文銭が使われていたのではないかと思います。また、南九州では宮崎県立総合博物館で調査した一括銭の中に大量の無文銭が入っていました。南九州とはいいいきれないので、今はクエスチョンマークを付けておきますが、九州の山間部には無文銭が多いのです。琉球では鳩目銭、あるいは當間銭と呼ばれる無文銭がたくさん出てきます。つまり、無文銭の出土状況からも地域性があることを証明できます。

今からもう25年ほど前になりますが、無文銭の鋳型が大量に堺から出土しました。文献には「さかいぜに」という記録もあり、これを短絡的に結びつけるのはいかがなものかと思いますが、堺で無文銭の鋳型が出土したのです。これは16世紀。つまり、時代が進んで経済が発展して貨幣がたくさん必要になった時に、状態の悪い貨幣でもお金として使わなければいけない経済状況であったということです。そこで、堺の商人町の一角で大量の無文銭がつくられていたという事実は、考古学から明らかにできました。

まだ短大の教師をやっていた駆け出しの時に、日本の一括出土銭で鈴木先生が第1期と呼ば



れた古い資料を整理したので、同じ時期の中国地方、京都、埼玉、新潟、青森のものをピックアップして、含まれている上位の銭種を折れ線グラフで示したものが図6です。図7は三宅先生がつくられた中国とベトナムにおける同様の図で、この二つはほぼ一致することがわかると思います。地域が異なっているのに一括出土銭に含まれている銭種は同じ傾向を示しているのです、その当時中国で混ざったものが日本に入ってきたと私は判断しました。私の研究はそこで終わっていたのですが、2000年に三宅先生が中国に留学し、中国の出土銭や最近ではベトナム調査ではほぼ同じであるということがわかってきたのです。

銭貨製造技術（1）

櫻木 日本の中世は中国からの輸入銭を使っていた時代であると高等学校の教科書には書いてあります。しかし、大半はそうかもしれないけれど、日本国内でつくっているものもあると私は考えました。では、どうすればお金をつくっていたことが証明できるのかと考えた時、鋳型を見つければそこでつくっていたと考えて間違いないだろうと思いました。そこで、国内で銭貨の鋳型が出土している場所を探してみると、有名なのは京都で、ここの鋳型は大きいのです。写真5の右は、真ん中の湯道を挟んで左右に銭貨が見えており、縦方向は5枚が確認できるので、最低でも10枚はありそうですが、正確にはわからない。鋳型というのは、製品ができあが

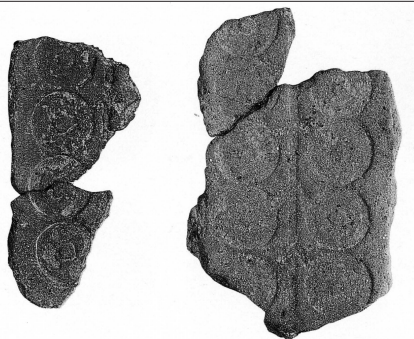
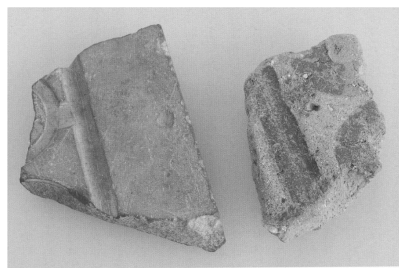


写真5 京都出土の銭貨鋳型

（出典）国立歴史民俗博物館（1997）『お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史—』33頁より



博多遺跡群出土銭貨鋳型

写真6 博多遺跡群出土の銭貨鋳型

（出典）大庭康時ほか編『中世都市博多を掘る』（海鳥社 2008）212頁より



写真7 富壽神宝の母銭（大英博物館、135頁）



写真8 寛永通宝の彫母（大英博物館、165頁）

* 大英博物館資料写真については、Shinichi Sakuraki, Helen Wang ほか編『Catalogue of Japanese Coin Collection(pre-Meiji) at the British Museum』2010より

ったら壊してしまうので細片化します。堺のものは小さく、特に「真土（まね）」と呼ばれる銭貨の表面に塗る粒子は細かく、調査で鋳型は見つけにくいのです。

京都で出土したものが13～14世紀と一番古く、堺のものは16世紀と新しい。京都の次は、15世紀の鎌倉の井戸から出てきたものです。京都、堺、鎌倉といえば中世の大都市で、私の住んでいる博多も同様ですから、つくっていないはずがないと考えました。私は博多遺跡群の調査に関わっていたので、調査担当者に「鋳型は見つけにくいけれど探して欲しい」とお願いしておいたら、福岡市教育委員会の大庭康時さんから「砥石だと思っていたけれど、銭の鋳型みたいだ」と電話がかかってきました。写真6のように左は確かに石製鋳型で、いまだにこれは日本で出土した唯一のものです。私は粘土製の鋳型を探していたので、ゼミ生を連れて現場に行き、人海戦術で探したら右の1個を見つけてくれました。探せばあるのです。従って、現在では4カ所。そして、まだ報道されていませんが神奈川県でも出土しており、いずれもう少し出てくると思います。大都市を中心とする技術を持っている人間がいる地域で、我々が模鋳銭と呼んでいる日本製銭貨はつくられていた可能性が高い。また枝銭も、枝から切り離していない未成品ですから、そこでつくっていたということの証明になります。ということで、鋳型や未成品を探すことによって国内生産の可能性を追い求めています。

次は古代銭貨、いわゆる皇朝十二銭の話です。出土データの全国集成は作業量が膨大で、全報告書を見なければ資料のピックアップできないので、出土銭貨研究会という全国組織の各県世話人にその作業をお願いして、出来上がった分厚い資料集は重要なものになっています。結論だけを述べると、出土地点は畿内、近江、加賀と日本海側に伸びており、古代律令政府の勢力が伸びている方向がこれでわかります。そして、鋳造時期が50年と長い和同開珎の出土数が一番多い。次に鋳造時期が短い万年通宝が少しで神功開宝となる。奈良時代はこの三種です。そして平安の隆平永宝からはほとんど少なくなっていくのを見ると、平安初期までで実質的な律令国家による貨幣政策は破綻を来しているのだらうと私は思っています。原料銅が得にくくなっているので、前銭を回収し溶かして新しいものをつくろうとします。また、法令を見る限り新銭1枚で旧銭10枚と交換する政策ですから、通用するわけがないので、回収もうまくいかなかった。和同・万年・神功という奈良三銭は混ざって同時に出土することが多い。これは回収が上手いかわず、明らかに同時に使っていたという考古学的な証拠です。

また、出土地点を丹念にチェックしていくと、どうも古代の官道沿いに散らばっており、その途中にある官衙、公的施設などから出土しています。それは現代でも同様で、政府が何かやろうとすれば、公的なルートに乗せて役人に持たせて、「おまえたちが率先して使え」という話になるわけです。このように、古代の律令政府が発行した貨幣は、流通の特徴を出土銭から見て取ることができます。博多は大宰府に近く、大宰府は「遠の朝廷」とも呼ばれるので、ここから出土するのは当たり前ののですが、博多遺跡群からもばらばらと出土するのです。これは何を意味しているのか。文献には残っていませんが、港のあった博多にはおそらく公的な機

関が置かれていたはずですが。先ほど商業活動の中で銭貨が使われているという例をあげましたが、私は博多にも役人がいた場所があった可能性があるのではないかと思います。

次は、20年前に出てきた飛鳥池遺跡の発掘成果です。私にとって衝撃的だったのは、飛鳥池遺跡から鋳型あるいは鋳棹、未成品、スラグも含めてそこでつくっていたことがわかる鋳造関連遺物がセットで出土したことです。つまり、そこが造幣局であったという衝撃的な事実でした。特に富本銭の金属組成について、奈良文化財研究所が銅とアンチモンの合金というプレス発表をしたので、銅と錫と鉛ではないと聞いてびっくりしました。そこから私は、今まで知らなかった金属についてもっと勉強しなければいけないと思いました。私の推測では錫が得られなかったので、同じように硬いアンチモンを入れたのかなと想像しています。展示されている飛鳥池遺跡の枝銭の横に破片がたくさんありますが、あれはガラスのように割れていますよね。これは間違っているかもしれませんが、アンチモンを使っているせいではないかと私は考えています。

また、近世初期の銭貨の金属組成を分析する時には、ヒ素や鉄などの微量元素に注目する必要があります。とりわけヒ素は、日本製のヒ素銅に含まれていることがわかってきました。三宅先生もおそらくこの問題意識を共有しておられますが、ベトナムで出土した日本銭からもヒ素が検出されました。錫や鉛にも当然注目しなければいけないのですが、ヒ素や鉄にも注目しながらこれから研究しなければいけないということです。

質疑応答（2）

菊池 かなり専門的な話に踏み込んで説明していただいております。まだ先もありますから、ここでいったん区切って、ここまでのところで何か質問やコメントがあればお願いします。

私から少しお聞きしたいことがあります。流通圏のところですが、流通圏というのは通貨として同じ種類の貨幣がどこで流通しているかということで、前のディスカッションの部分の林先生の質問にも関連するのですが、こういう貨幣がある地域では流通してはほかではしていないというのは、経済関係とか交易関係に一致すると解釈していいのでしょうか。同じ貨幣が流通しているところは交易圏というか、強い交易上のつながりがあり、そうでないところはそうでもないという見方をして大丈夫なのでしょうか。

櫻木 甘い表現だとは思いますが、ともかく出土しているお金の種類によって地域圏がつけられるわけです。考古資料からある地域で一定の銭種が多く出土するという現象があるので、それを「流通圏」と言っています。むしろ経済学的な史料から、これを強めるとか、これと流通を結びつけるというようなものがあればいいのですが、現在のところは菊池先生のご指摘についてはアイデアがないですね。

菊池 わかりました。さらにですが、出土したものに基づいたグラフなどを見る時に素人目に

よく思うのですが、この結果は今のところ見つかった貨幣をここに投影しているということで、発掘が進んで新しいものが見つかってくると少し変わる可能性も出てくるということでしょうか。

櫻木 恣意的に選んでいるわけではないので、例外的なものは存在するのですが、一応こういうミックスの割合になっているということは動かないと思います。三宅先生、いかがでしょうか。

三宅 左にあるような図を櫻木先生が示されたのを受けて私も同じような作業を、中国で発見されている一括出土銭でやって集成して、そして比較してみたのです。そうしたら非常によく似ていることがわかりました。中国でも、日本で出てくるお金と同じような割合を示している。また、ベトナムでも同じような時期の一括出土銭がありましたのでそれを調べてみたら、やっぱりグラフが一致するのです。インドネシアでも同じことをしましたが、やはり一致するのです。

そういったことを考えると、まず中国でこういう割合のお金が、いわゆる渡来銭になるような北宋銭を中心とするようなお金があって、それが日本に持ち込まれた。あるいは、同じ時期にベトナムやインドネシアに運ばれていったというふうに考えるといいのではないかなと思っています。ですので、遺跡の数が増えれば増えるほど、逆に一致する部分というかよく似ているということがわかってきているというのが現状かと思います。

菊池 わかりました。ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。それでは続きをお願いします。

銭貨製造技術（2）

櫻木 写真7は大英博物館所蔵の富寿神宝という平安時代のお金です。ケンブリッジ大学留学時に調査したのですが、銭径が少し大きく、母銭と呼ばれるお金をつくる元のお金であることに気がつきました。金属は固まる時に「鑄縮み」という現象を起こすので、少し小さくなります。つまり、母銭は流通銭より大きいのです。また、鑄ざらいという細かい仕上げ整形をしていることが観察するとわかります。やはりモノ資料を見ないとだめなのです。日本にある皇朝十二銭の母銭は、奈良文化財研究所が持っている和同開珎が1枚だけです。つまり、現在確認できている古代銭貨の母銭は、奈良文化財研究所のものとこの大英博物館の富寿神宝しかないのですが、それを私が見つけたしまったという話です。

母銭についてですが、古代にはおそらくハンドメイドの「彫母」からまず母銭をつくって、次に流通銭をつくったと思います。それが近世になると、錫は加工しやすいので、その中間に錫母をつくっていたことがわかっています。錫というのは非常にさびやすい金属なので、ちょっと触ったりするとそこがさびてくるので、我々も素手で扱うとよくないということです。参

考までに、写真8は寛永通宝の彫母と呼ばれる立派な母銭で、私は初めて大英博物館でこの母銭を見た時、その美しさに感激しました。これはコレクター大名であった丹波福知山藩主朽木昌綱の収集品で、富寿神宝もありますが、大英博物館が1884年に買い取っています。

銭貨の原材料は銅、錫、鉛の3合金系ですが、日本で模鑄銭をつくるようになった時には錫が一番得がたいので、銅・鉛系もありますし、日本製の銅だけを使えば純銅系と私が呼んでいるお金ができます。北宋銭を鑄つぶして新しく模鑄銭をつくれば3合金系になるし、通常の北宋銭は、約7:1:2の割合で、それが目安になります。

富本銭のように銅・アンチモン合金が古代には存在していましたが、和同開珎も古いタイプのものは銅・アンチモン合金があるということがわかってきました。また、江戸時代の半ば、明和期には銅・亜鉛合金、つまり真鍮銭が登場します。中国では明末から存在する真鍮銭が、日本では江戸中期からという事実があり、これは亜鉛が輸入品だからです。真鍮のお金は黄色っぱいのでわかります。また、鉄銭は中国には古くからあるのですが、日本では元文期以降、銅の不足で鉄を使わざるをえなくなり登場します。鉄銭は赤い錆で手が汚れるので庶民から嫌われた銭でした。ただ幕末近くになると、流通していた寛永通宝は大半が鉄銭だったと推定されています。銅銭は質がよいので好まれ、退蔵されるからです。ですから、維新後に新貨との交換レートが、鉄銭と銅銭とはまったく違い、銅銭のほうが高かったのです。

先ほどオックスフォード大学の銭についても私が全部データ化したと言いましたが、アシュモリアンにも富本銭があったのでびっくりしました(写真9)。大英博物館には3枚ありますが、日本銀行貨幣博物館は持っていません。では、なぜここに富本銭があるのか。実はこれも朽木昌綱のコレクションです。でも、イギリスの学芸員はこれが富本と読めないで気づかなかったのです。

760年、和同開珎から次の銭貨に交換する時に万年通宝という銅銭をつくるのですが、そのときに金の開基勝宝、銀の大平元宝をつくったという記録が残っています。その証拠として、昭和12年に奈良の西大寺からこの金銭が31枚出土しました(写真10)。江戸時代に1枚だけ出していたので、偽物と疑う人もいたのですが、昭和の発掘で間違いありません。ただ、通貨であったかどうかは別です。つまりマジカルな機能を持たせた銭である可能性はあり、ともかく現物はあった。銀のお金のほうはまだ出てきていません。

自然科学的分析手法

櫻木 金属組成の分析法は2つあり、まず蛍光X線分析は定性分析で一般的に行われていますが、金属組成の傾向しかわからないと理解しておいたほうがいい。その数値を絶対視してしまうと間違ってしまいます。違う蛍光X線装置で分析したものを1つの表に並べてしまうことも、自然科学系の人に言わせればむちゃくちゃということになりますが、我々文系の人間はやって



写真9 富本銭 (Ashmolean)
(<http://hcr.ashmus.ox.ac.uk/collection/8>)



写真10 開基勝寶金銭
(東京国立博物館)

(出典)国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱—錢貨の列島2000年史—』(1997) 21頁より

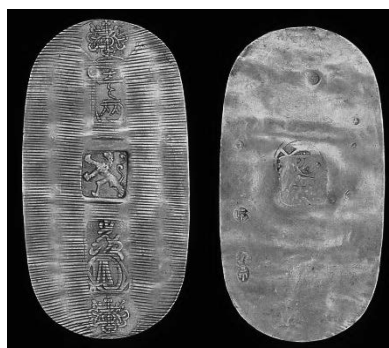


写真11 オランダ東インド会社獅子刻印
慶長小判 (大英博物館、198頁)

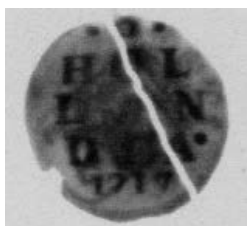


写真12 出島出土2スタイフェル (STUIVER)
銀貨X線写真

(出典)長崎市教育委員会『国指定史跡出島和蘭商館跡銅蔵跡他中央部発掘調査報告書』第2分冊(分析・考察編) (2018) 95頁より



写真13 一貫文緋 (小和田館遺跡出土)

(出典)国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱—錢貨の列島2000年史—』(1997) 47頁より

しまいがちです。もう一つ、ICP-AES (誘導結合プラズマ発光分光分析法) という方法があります。これは資料を少しだけ削って溶かして蒸発させプラズマ状態にして光の色を調べるという定量分析です。正確性はありますが破壊分析なので、一般的には機械も簡易で安価な蛍光X線分析という定性分析が行われているのが現状です。さらに合金には偏在があり、部分によって鉛が多い、あるいは鉄が多いということがあります。だから、分析値というのは判断の絶対的な要素にはならないと理解しておいたほうがいいかもしれません。

鉛同位体比分析のよいところは、非常に微量で分析ができるので、破壊がちょっとだけで済むということです。先ほどの原城のインゴット秘話と同じ様な話ですが、25年程前に佐渡金山の奉行所跡から大きな鉛のインゴットが多数出土しました。1枚が40kgあり、約7トンが埋められていたのです。奉行所内に埋めたという記録が残っており、何カ所かに分けて埋めていたのですが、掘り出そうとしたら一ヶ所だけ見つからなかったのです。奉行所のような公的機関が埋めていてもわからなくなってしまう例があるということを知っておいてください。佐渡の奉行所は近世なので、鉛の国内生産は再開しています。ということは、その鉛は国産だろうと当てを付けられるわけです。でも、鉛同位体比分析でそのことを実証しておかないと断定できないわけで、新潟県教育委員会もぜひ分析してみようということになり、別府大学の平尾良光先生がやってくれました。結果は国産、それも新潟県の鉱山のものであることがわかりました。金や銀を精錬する時には鉛が大量に必要なので、奉行所は大量の鉛をストックしてい

たのです。灰吹法の技術を石見銀山で出土した鉄鍋が示しているので、少しだけ説明します。銀の取り出し方は、まず鉱石を鉛と混ぜて溶かします。銀は鉛と相性がよくくっつくので、それを灰に入れて火にかけ、鉛と酸素を結合させ、銀だけを分離することで純粋な銀ができます。これが灰吹法の原理です。この技術は非常に重要なので、これからもう少し研究を深め、総合的に研究しなければいけないのではないかと思います。

鉛に関係する話をもう少しします。原城を発掘すると火縄銃の弾丸がたくさん出てきました。遺物の整理過程で磨いたらキラキラするものがあり、これは銀だろうということで私に電話がありました。それで見に行ったら、弾丸と形は似ていますが、やはり銀でした。つまり、江戸時代前半、1637～38年には秤量貨幣である小粒銀や豆板銀と呼ばれるものが流通していて、籠城した兵士が攻めた側の兵士かはわかりませんが、おそらく懐に持っていたものと考えられます。それから、インゴットとは思えないかもしれませんが、大分市の大友氏関係の遺跡から出土した鉛は、直径5cm、高さ2cmほどの円錐形の帽子のように見える変な形です。それと一致する鋳型がタイで見つかったのですが、現物はなくなったそうです。つまり、鉛の原料をタイから持ってきていることがこれでもわかるのです。

梵鐘の鋳造年については黒田明伸さんが言われていることなのですが、梵鐘は紀年があるからそれを調べることで金属の交易がわかるという話です。新安沈船に錫のインゴットが積まれていたのは、中国の寧波からインゴットの形で日本にない錫を持ってきたという明らかな証拠です。

近世初期の金貨・銀貨は、少額のものばかりで、ヨーロッパの貨幣もそうです。日本でも実際に切り遣いしていたものが考古遺物として出土します。中国では銀錠と呼ばれるインゴットが使われていました。ここでいったん切りましょうか。

質疑応答（3）

菊池 ここまでの内容について質問等があればお願いします。

櫻木 湊さんから質問がコメントで入っていますね。「N領域の鉛はどのようなプロセスを経て日本に入ってきたのか」。N領域のものが南蛮貿易で入ってきたことがわかるかどうかということでしょうか。それについては、先ほどから述べているように、鉛がタイから南蛮貿易で入ってきているのは物的資料からみて間違いないので、交易を専門にしている研究者に文献から明らかにしてほしいという私から問題提起なのですが、どうでしょうか。

菊池 なるほど。考古学系の研究者と歴史学系の研究者の協同ですね。以前、鶴島先生の科研のシンポジウムで貨幣学の専門家とした議論でも、そのような話になりました。考古学者や古銭学者は貨幣そのものを分析して分かる範囲のことを特定するので、そこから先は歴史家に任せる、ということでした。沖縄で古代ローマのコインが見つかった際に、それはローマのいつ

頃のこういったコインなのかということは古銭学・貨幣学が解明して、それが商業や経済の歴史の中でどういう解釈をしたらいいのかというのは、歴史家の仕事であると。だから、櫻木先生のおっしゃる学際的な部分が必要になってくるということですね。

櫻木 そうですね。チームをつくっていろいろな分野の知見を得ながら総合的に判断していくというのが我々の研究スタンスではないでしょうか。

菊池 そこでおもしろいと思うのは、鉛も輸入する段階があって、また国産に戻る段階があるというお話です。これも別途の研究が必要かと思いますが、鉛鉱山業がいったん枯渇して輸入する必要があったところから、新たに鉱脈が発見されたということでしょうか。

櫻木 そうですね。鉛は古代には採れており、それほど希少な金属ではない。ただ、大規模に鉛を採る必然性がなくなっていたところに、16世紀後半になって需要が増え、輸入しなければならぬほどの量が必要になってきたということです。ちょっと難しい話になりますが、古代銭貨がつかられなくなる理由は、鉱脈の上層にある酸化銅を採り尽くしてしまい、中世以降は深いところに存在する硫化銅を使うように変わっていくという大きな技術的变化もあります。今日はその細かい話は避けたいと思います。

菊池 ありがとうございます。

岡部 朽木昌綱のコレクションについて少し伺いたいのですが、日本から流出した経緯というのはわかっているのでしょうか。大英博物館は朽木家から購入したのでしょうか。

櫻木 はっきりはわからないのですが、2点言わせていただきたいと思います。第3回目のワークショップは博物館資料の調査というタイトルにしたいので、この話はそこでしょうと思っています。一説によると、藩主が集めた現金化できる資産だったので、幕末近くに西洋式の鉄砲を買うために売り払ったという伝承が残っています。ただ、その後どうなったのかがわからず、大英博物館に入っていることが新聞報道でわかり、私が調べに行ったということです。

岡部 ということは、流れ流れて大英博物館に行き着いたという可能性も高いということでしょうか。

櫻木 そうですね。ただ、イギリスのディーラーが大英博物館へ売込みに行っているのも、それほど転々とした可能性はないと考えていますが、はっきりはわかりません。

岡部 朽木コレクションは、基本的に大英博物館にまとまって収蔵されているのでしょうか。それとも散逸しているのでしょうか。

櫻木 散逸していないと思います。実はアシュモリアン博物館が昌綱のコレクションを大量に持っています。つまり、ディーラーが大英博物館に売込みに行き、その売れ残りをアシュモリアンに持って行っているのです。大英博物館の調査時に私はこれがすべてだと思っていたのですが、アシュモリアンにはもっと大量の昌綱コレクションがありました。今後の課題として、この2つの資料をデータ上で合成し、当時の昌綱が持っていた貨幣を突き止めることです。昌綱は学者大名でしたからデータを残しているのです。彼が書いた銭譜から記録を拾い出して現

物と一致させる研究をしたいと考えており、私が生きている間に完成するかわかりませんがやろうと思っています。

岡部 ありがとうございました。3回目のワークショップを楽しみにしています。

菊池 ありがとうございます。では、議論を先に進めてください。

海外との接点

櫻木 ここに示した小判の真ん中には東インド会社のライオンのカウンターマークが入っており、大英博物館には2枚所蔵されています（写真11）。「小極印」と呼ばれるごく小さな刻印も裏にいくつか打たれており、これらは両替屋が品質を確認するために入れたものと言われていますが、まだ研究がされていないのです。また、写真12は出島から出土した銀貨のX線写真で文字が読めます。割れていましたが、「1717」と見えますから1717年の銀貨です。私はこのようなものの調査をしてきました。

次は先ほど言った緡銭の話です。『大乘院寺社雑事記』という史料があり、1480年のところに「下関から西は100枚ちょうど東は97枚」と記載されています。出土銭を見ても、太宰府市で出土した緡銭は100枚ですし、それ以外の地域では大半が97枚です。日本では、97枚が中世の一緡、つまりこれが1単位であったと理解していいのです。完全な形の一貫文緡が山梨県北杜市から出土しており、これだけきれいな緡銭がわら紐も含めよく残っていたなと思います（写真13）。近世は緡銭のつなぎ方が違い、九六銭と呼ばれる96枚でした。図8は有名な『山王霊験記』に描かれた借上からお金を20貫文借りている場面で、実際に描かれているのは5貫文ですが、非常にリアルに描かれており、絵画資料は重要です。また「洛中洛外図屏風」で、ひじかけをしている親父の後ろに縄でくくられた大量のお金が描かれ、肘の下には緡銭が垂れ下がっています。丹念に探すといろいろな銭貨に関する絵画資料が見つかります（図9）。

次は私が岩国で調査した一括出土銭で、歴史資料として後世にそのままのものを残さなくてはならないと最近を考えています（写真14）。もう銭貨全部をはぎ取って何が何枚あったという時代ではないと考えるようになりました。この資料は出土時には銭貨の上に木板が載っていましたが、それを取ったものです（写真15）。調査担当者から、この状態で「銭は何枚くらいありますか」と聞かれ、私には大きく4つのブロックが見えました。つまり、先ほどの銭屋の後ろにある緡銭が4つなので、5貫文緡だと2万枚、10貫文緡だと4万枚です。しかし、現状保存にしたので正確な枚数は不明で、あとは重さを量って、だいたい1枚が3.5グラムとして計算してみればいい話です。

写真16は、三宅先生とハノイで調査した際に取り扱った非常に貴重な緡銭で、私が一枚一枚をはぎ取り、裏表の向きも確認して読み取り、緡を正確に記録しました。最近では、緡銭をはぎ取らずに読み取れるような方法はないかと考え、CTスキャン装置も使いました。次も三宅先



図8 『山王霊験記』に描かれた緡銭



図9 「洛中洛外図屏風」に描かれた緡銭

(図8・9 出典)国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史—』(1997) 47頁より



図10 ベトナム北部の銭貨移動図
(出典)筆者作成

生のベトナムでの研究成果です。清朝銭には背面に造幣局名が書いてあり、ハノイでは「雲」という字が書いてあるものがたくさんありました。図10で示したように、紅河を伝って雲南からストレートにハノイに来ることができます。考古学で大事なことは、モノ資料から事実を示すことで、この調査では紅河を伝ったルートを実証しました。また、我々は去年までハティンで調査をしましたが、そこでは「広」という字が多いので、こちらは広東からの海沿いルートが想定できます。先ほどから「流通圏」と言っていますが、銭貨の流路を考古資料から具体的に示すことができると考えています。また、ベトナムの一括出土銭をいくつか調べていくと、制銭と「コピー銭」の二種類があり、流通銭貨の二重構造が読み取れます。これについては今後精緻に調べてなければなりません、対外決済貨と域内貨の区分というイメージです。

それからベトナムの短陌慣行ですが、これは先ほど言ったように67枚が基本です。なぜ我々がベトナムで調査したかという、長崎貿易銭と呼ばれている日本で作った元豊通宝がベトナムで出土するのです。ベトナムの研究者から「日本人が見ればすぐにわかるだろう」と言われて、日本から助っ人に行ったという形です。現在データ化をしています、この元豊通宝がかなりの割合で含まれています。長崎貿易銭をつくったのは17世紀後半で、その時期に輸出されたものが19世紀になってもまだ残っていたということです。17世紀にベトナムで流通していた貨幣を調査できれば、結構な量で日本製のものが含まれており、日越間の交易が明らかにできる可能性があると思います。



写真14 中津居館跡一括出土銭
の展示

(出典)『考古学ジャーナル』No.746,
2020, 25頁より

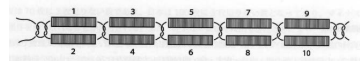


写真15 板を取り除いた後の緋銭
(岩国市教育委員会・筆者撮影)



写真16 ベトナムの緋銭とその製作方法

(出典)昭和女子大学国際文化研究所紀要『ベトナム
北部の一括出土銭の調査研究』Vol.12, 2008 より



最後に、古銭学と考古学の関係について代表的な例を一例だけあげます。考古学の利点は、層位学と言って地層で年代を測ることができるのです。地層は地震があってもひっくり返ることとはなく、ずれても上下関係は変わりません。例えば、富士山が最後に噴火した宝永の噴火層よりも下の層、小さな軽石がたくさん入っているスコリア層の下であれば1707年よりも古いということが確実にわかります。宝永噴火層の下から、古銭界で1726年初鑄とされるお金が出てきました。このようなことは絶対にありえないので、古銭学で言われていることをそのまま信じてはいけないということです。

寛永通宝は、現在の考古学でもほとんど研究対象となっていません。考古学の中で寛永通宝はまだ遺物としてじゅうぶん認知されていないのです。だから私は『考古学ジャーナル』で「寛永通宝の考古学」という特集号を組み、三宅先生にも書いてもらい、自分なりの問題意識を表現しました。震災で益城町の蔵から大量の寛永通宝が出てきた時、私がやるしかないという思いで、地元の方の応援を得ながら半壊した屋敷の中で調査をしたわけです。そこでわかったことは「マ頭通」が多い。我々は「通」の旁上部を「マ」と書きますが、寛永通宝では「コ」となっているのが普通です。この「マ頭通」は関西でつくられたもので、摂津高津銭の割合も高いことから、九州では関東より関西との結びつきを強く感じます。また、背面には長崎でつくったことを示す「長」とあり、これが多く含まれているのがこの資料の一番の特徴です。つまり、ほかの史料を見ても熊本は天草から島原を経る長崎ルートが存在していたことがわかるので、

この資料は幕末だと思いますが、長崎との関係を推測できるのです。

三宅先生、先ほどのベトナム調査について補足をいただけますか。

三宅 ベトナムの調査についての補足ですか。清朝のお金ということでは、我々が最初にハノイで調査を始めた時には、きっと海外交易がすごく重要な形でお金の流通にも関わっていたのだろうと思っていたのですが、ハノイで調べてみたら内陸のものが入ってきていて、あまり広東のものなどは見受けられなかったということが新しい発見かなと思っています。

考えてみると、地域をまたぐような大口の決済にはきっと銀といった別のもので決済していて、ハノイと紅河流域はおそらく地域的なつながりがあって、地域通貨的な小銭というか、そのための銅銭のやりとりが反映されていて、紅河を中心とした小口の決済というか、大きなやりとりより日常的なお金のやりとりの中でハノイには雲南のお金が多いのかなということが発見だったということになるかと思います。

ハティンというのはもう少し南の中部の港、日本町があったようなところにも少し近いようなところで、そういうところではおそらく海からの流入が反映されていて、それで広東などのお金が入ってきたり、あるいは日本の長崎の元豊通宝などがすごく多い。

ハノイにももちろん長崎の元豊通宝はあるのですが、見た感じでは中部のハティンなどと比べると割合はごく少ないという印象を受けますので、おそらくお金のやりとりをするような地域的な。それを「流通圏」と言っているかどうかということはあると思いますが、やりとりするようなところは外からのお金を見ると見えてくるかもしれないと考えているところです。

菊池 ありがとうございます。今のお話をうかがっていてすごくおもしろいと感じました。私は経済史研究をする上で文字史料を中心に使っていて、貿易や地域間の経済関係を見ていこうとした場合、史料は例えば港での税の台帳などが中心になってきます。こうした史料では、遠隔地との商品取引などはわかるのですが、在地内の関係とか後背地も含めた関係というのは文字史料にはなかなか出てこない。でも貨幣を見てみると、今おっしゃったような内陸ないし在地で日常的に行っていた経済的な関係がよりミクロに見えてくるということがわかりました。やはり文字史料だけで見ていては限界もあるんだなと思いました。

質疑応答（4）

菊池 櫻木先生、ありがとうございます。発表は以上になります。古澤義久先生がおいでになりましたので、簡単に自己紹介をお願いしてよろしいでしょうか。

古澤 皆さん、こんにちは。福岡大学の古澤と申します。今日はお招きいただきまして誠にありがとうございます。私は3月まで長崎県の公務員で発掘調査に従事していたのですが、この4月から福岡大学に着任しました。専門は考古学になります。韓国や北朝鮮の先史時代を一所懸命にやっていたのですが、中国のお金がとても好きで最初は片手間に古銭の勉強をしていた

のですが、最近はどうぶり古銭の勉強をさせていただいているという感じです。古銭の中でも、うんと古い戦国時代とか秦漢の頃の古文銭と、それから明代・清代のお金とかそのあたりを勉強している感じです。どうぞ皆さん、よろしくお願いいたします。

菊池 よろしくお祈いします。それでは、これからジェネラルディスカッションを始めたいと思います。全体を通じて質問やコメントをお願いします。

櫻木 最後に一言だけ。第2回目は、今日話した研究の内容をより詳細に深めた話をしたいと思うので、今日の質問以外にもお寄せいただければ、それを踏まえて話をします。それから、どの部分が一番知りたいのか。つまり、岩国の調査についてもう少し詳しく知りたいとか、考古学の調査を第2回目。第3回目は博物館資料の調査ですから、皆さまが知りたいことを出しておいていただければ、事前にもらったお題の中で最大限やっていきたいと考えています。

菊池 よろしくお祈いします。第2回は対面で行えればと思いますが、どうなるでしょうか。それでは、どなたからでもどうぞ。

古澤 三宅先生とのベトナムの調査の話に興味深く拝聴したのですが、ハティンやハノイで長崎元豊と寛永通宝がけっこう出ているという話でした。それを日越交流の証と見ることはできるとは思いますが、それらのお金が日本から直にはなく、中国の清からベトナムに入ったという可能性はいかがでしょうか。長崎貿易銭は、清朝が銅銭を欲しがるけれども寛永通宝を輸出することができないので、わざわざ北宋の銭名でつくって清朝にたくさん流れていて、寛永通宝も密輸されてたくさん流れていたというのは周知のことだと思うのですが、清朝がたくさんの寛永通宝や長崎元豊を持っていたわけですから、ベトナムで見つかるものも日本から直接ではなく、清朝にストックされていたものが流れたとか、そういうことはいかがでしょうか。

櫻木 当然、そういう可能性はあると思います。ただ、イメージとしてはそれが中国の中で広く流通していて、その一部がベトナムに行ったにしては色濃く残りすぎているなあとと思います。中国銭との割合も考えなければいけないだろうと思います。もう一つは、例えば寛永元年の豊前細川氏の鑄銭事業がうまくいかなかった時に、時代は半世紀くらい違うのですが、トンキンのほうに材料も含めて持ち出したということが記録として残っているので、やはりストレートのルートは否定できない。

ですから、古澤先生の言われるように中国から流れたものがあるのは間違いないだろうが、いったん中国で流通していたものが一部、ベトナムに再度流れたというのはなかなか割合的にはどうなのかなと私は思います。三宅先生、いかがですか。

三宅 長崎貿易銭に関してですが、中国では清朝のお金の出土銭の状況もはっきりわからないのですが、私の調べた限りでは、ないわけではないのです。長崎貿易銭はそこそこ中国国内でも発見されているのですが、みんなが注目するほど大量に発見されているような形ではないようです。ですので、寛永通宝やベトナムのお金なども清朝のお金に混じって中国ではかなり流通しているわけですが、そういった意味では我々が調査したようなハティンの一括出土銭の中

には相当な割合で長崎貿易銭が入っているので、その地域の貨幣経済の一部を担っているようなイメージです。

そういった形で中国で長崎貿易銭が使われていたかという点、ちょっとどうなのかなと。実際のところはよくわからないのですが、今の出土銭を集めた史料で見る限りはそんなイメージになっています。

古澤 最近、中国でも各省や市で発行される報告書の中で、後ろのほうに清朝銭が出てくるような遺跡や窖藏銭が報告される例が増えていて、そういうのを見てみると、日本の寛永通宝や長崎貿易銭が入っていて、それに次いでベトナムの景興銭が清朝の窖藏銭からけっこう出ているのを見ると、ベトナムから清朝にコインの流れがあったとしたら、その反対の流れはあるのかなのか。一方的にベトナムから清朝に吸い込まれているのか。そのあたりに関心があるので質問した次第です。

櫻木 今の話でははっきり言えるのは、ベトナム国内では中国清朝のお金が大量に使われており、ベトナムだからベトナム銭だけになっているということではないのです。

岡部 基本的な質問ですが、寛永通宝というのは長崎からの輸出が禁止されていたのでしょうか。

櫻木 禁止されています。

岡部 ということは、輸出という形ではなく、何らかの方法でベトナムへ出ていっているということになるわけですね。

櫻木 一部、わずかながら漏れ出ているのです。それを三宅先生に出土地点をデータ化してもらったのが、先ほど述べた『考古学ジャーナル』4月号の「海外で出土している寛永通宝」です。公式には出るはずがないのです。

岡部 私が熊本の出身ということで気になったのですが、2016年の熊本地震で出てきたという益城町の土蔵の件をもう少し伺ってもよろしいでしょうか。

櫻木 その持ち主も自分の蔵の中に大量のお金があることを知らず、蔵が地震で倒壊して出てきた。そしてそれが町に寄贈され、文化財であるため調査しなければならないけれど、町にはその余力がないので、私がやったということです。

岡部 では、地震がなければ出てこなかったということでしょうか？

櫻木 そうということです。

林 先ほどのお話の途中で木浦、朝鮮半島の南にあるシナというところで船の中から大量の古銭が発見されたということですね。韓国のサイトを調べてみると、韓国ではまだそれがどんなものかはっきりわからないという状態で、3つのストーリーがあるのかなということです。

その時代、中国では元なので金属の貨幣はあまり使われていないということなので、それを日本に輸出して、日本では金がとても安いのでそれと交換して持つて行くつもりだったという説があります。日本側が必要なのでそれを使うために輸入したという説もあります。3つ目の

説は、仏像をつくるために大量に輸入したと。韓国ではまだはっきりしていないということのようですが、いかがでしょうか。

櫻木 おっしゃった通りで、これは日本経済史でよく議論されることですが、中国で使われなかった銭であるがゆえに日本に需要があったので流れてくるという話です。ですから、林先生のおっしゃった第1と第2の説は表裏一体のような関係です。3番目が大事なことで、さっき梵鐘の話をしました。銭貨を金属の原材料として使うというやり方です。銭貨は沈没船の船底部分にあってバラストの役目をしていたことは間違いありませんが、それが日本に来れば、一文銭であればそのまま通貨になるわけです。しかし、大銭もたくさんありました。日本の中世社会では大銭を使っていた形跡はなく、一括銭の中にもほとんど含まれていません。つまり、日本は中国の貨幣制度をモデルにしながら一文銭のみの体系だったのに、新安沈船には大量の大銭が含まれています。これを日本に持ってきて使えないじゃないかという話ですが、私はある論文でインゴット説を書きました。さっき林先生は仏像とおっしゃいましたが、梵鐘も含め仏教関係の製品をつくるための材料として、金属のインゴットではなく銭貨を使っていたということは、鎌倉の大仏が宋銭を鋳つぶしてつくったという伝承があるくらいなので、間違いなく日本ではそういうことが行われていたのです。新安沈船の銭はそういう原材料だと書いたことがあるのですが、反論もないし、そうだというサポートもありません。

岡部 第3回のご報告とも関連してくるのかなと思いますが、熊本の砥川古銭のような例、旧家の蔵に残されているというのは、今でも珍しくないのでしょうか。

櫻木 旧家にはそういうものがけっこうあります。過去に私が講演していたら、鉄銭ばかりですが、うちの蔵から出てきたという数百枚の寛永通宝をもらったことがあります。

菊池 これも第3回の内容にも関わってくるかと思いますが、海外、ヨーロッパの博物館にも櫻木先生は相当に調査されておりますが、その印象といいますか、日本の貨幣を研究する上で海外の博物館では日本にはない貴重な貨幣はどの程度見つかるのでしょうか。

櫻木 大英博物館、あるいはアシュモリアンの昌綱コレクション、デンマークのブラムセンのコレクションであったり、バリの国立図書館にもフランスの軍人が集めた良好なコレクションなど、いくつかあります。また、特に16世紀後半、日本に宣教師たちがやってきた時代に、彼らは日本事情についていろいろな記録を残しています。その中には貨幣についての記事もけっこうあり、おそらく現物も持ち出していると思うのです。ですから、彼らが残した16世紀後半の日本の貨幣を発見できたらいいなと考えています。博物館資料も考古資料と同じだと考え、歴史を検証できる史料として博物館資料をデータ化したい。ライデン大学などオランダの資料はまだ見ていません。なぜかという、見はじめたら大変だということがわかっていたのでやめているのです。でも、補助金がついたのでやらざるをえないという状況になっていますので、最後はユトレヒトの貨幣博物館、ライデン大学に行き、近世の日蘭関係の中で持ち出された現物資料を見ようかなと思っています。コレクションという意味ではなく、あくまで経済史の一

環としてやりたいのです。考古資料として一括出土銭が出てくることはほとんどないので、そのつなぎと言ってはいけないのですが、博物館のコレクションを見せてもらっているうちに、研究者生活の最後になってこんな忙しいことになってしまったということです。

菊池 シンプルに考えてみるとオランダにはたくさんありそうだと思います。ポルトガルはどうでしょうか。

櫻木 ポルトガルには一度行きました。ポルトガル銀行の貨幣博物館を訪ねました。そうしたら2枚の金貨があったのですが、それは近年購入したものでした。ポルトガルには日本の古いお金があるはずだと学芸員に言い残し、今のところ調査は止まっています。

菊池 オランダの調査が残っているとおっしゃいましたが、未開拓、未発掘の貨幣としてどのようなものがありそうだという感触をお持ちでしょうか。

櫻木 地中海沿岸のポルトガル、スペイン、イタリアには古い時代のものが残っているそうだと思うので調べたいのですが、コロナ禍が一番厳しいところなので当分無理だろうと思っています。明治初期の日本紙幣をつくったキヨッソーネが持ち帰ったものがあることはつかんでいるのですが、とても一人ではやりきれません。

岡部 数年前に戦前の商社史の調査で、オランダのハーグにある国立公文書館に史料を見に行ったことがあります。その際にお世話になったアーキビストが、ここに来る日本人は近世以前の研究者ばかりで、近現代は非常に少ないと話していました。私は太平洋戦争中の占領期蘭領インドにおける日本の商社活動の史料を見に行ったのですが、非常に珍しがられました。近現代だと、日本の軍人・軍属とインドネシア系オランダ人女性の混血児問題などを調べる人が目立つ程度で、経済史・経営史関係の調査はほとんどないため、アーキビストも若干戸惑っていたのを覚えています。櫻木先生のオランダ調査も、大きな発見があるのではないのでしょうか。

櫻木 頑張ります。オランダの資料は残しておいたというのが正直なところで、やりはじめたら泥沼にはまったまま寿命が尽きてしまうという思いがあったのです。

古澤 オランダには朽木昌綱のコレクションというか、朽木昌綱はヨーロッパの貨幣をオランダの商館長を通して入手していたということでしたね。あの時に、日本の貨幣と交換したという話だったのでしょうか。朽木昌綱がどういうものを渡していたかということはわかるのですか。

櫻木 わかります。それは3回目の議論にしようと思います。古澤先生とは、またこれから密に議論していきましょう。先ほど言ったように、昌綱のコレクションについては復元したい。昌綱が集めたものはわかっているし、いま話が出たのはティツィングという人とのやりとりなのですが、西洋貨幣をティツィングからもらって『西洋錢譜』というカタログを日本で出版します。逆に、日本のよい貨幣をプレゼントした手紙も残っており、どんな貨幣を渡したかもわかっています。オークションのカタログなどがけっこう残っているので調べ、追跡したのですが、今のところはまだ現物の所在がわかりません。ただ、いずれそこは調べた結果わからなかったと書かなければいけないのかなとは思っています。

菊池 そろそろ時間になります。今日は前半のところで櫻木先生の研究の歩みをフィードバックしていただきました。先生は貨幣考古学を草分けとして開拓していったわけですが、その中でまとまった方法論があってそれを学ぶという形にはなかったと思います。史料論や研究上の技術的な部分については、どのような形で習得されていたのでしょうか。

櫻木 一言では語れないのですが、私は商学部出身で、商学研究科を出て学位は史学でもらいました。その意味では、誰からも専門的な教育を公的な場で受けていないのです。鈴木公雄先生は文学部なので、授業を受けたことは一回もありません。我流で自分なりに考えながらやってきました。今の質問に答えるとすれば、どの時期に何を考えていたかを書き残さなければいけないということです。

結論としては、文化財科学や史料論をしっかり考古学に取り込んでいく。つまり、私の若い頃には考古学というのは趣味的な捉え方をされることが多かったので、それに対して私は歴史学の正当な一員であるという認識で、考古学出身でもないのにそういう考え方を持って研究を進めてきました。逆に史料を読んでいる人は文献史学こそが王道だという意識が強いので、それをどうやって打ち負かすかということは正直考えていました。でも、今は文献に書かれていることは非常に大事だなと思っています。否定しているわけではないということです。

菊池 そうですね、そういったところをぜひ文字にしてまとまった形にしていきたいと思います。ひとつの研究フィールドをつくりあげていったのですから、貴重なものになると思います。

それでは時間となりました。やはりオンラインだと寂しいですね、ここで切っておしまいということになってしまいますので。第2回、第3回もありますので、今度は対面の形で行えればと思います。本日は櫻木先生、長時間ありがとうございました。皆さんもどうもありがとうございました。

〔終了〕

写真・図の出典

写真1・3・4 櫻木晋一撮影

写真2 櫻木晋一蔵

写真5 国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱—錢貨の列島2000年史—』(1997) 33頁

写真6 大庭康時はか編『中世都市博多を掘る』(海鳥社 2008) 212頁

写真7・8・11 Shinichi Sakuraki, Helen Wang はか編『Catalogue of Japanese Coin Collection (pre-Meiji) at the British Museum』2010

写真9 <http://hcr.ashmus.ox.ac.uk/collection/8>

写真10 国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱—錢貨の列島2000年史—』(1997) 21頁

写真12 長崎市教育委員会『国指定史跡出島和蘭商館跡銅蔵跡他中央部発掘調査報告書』第2分冊(分析・考察編)(2018) 95頁

写真13 国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱—錢貨の列島2000年史—』(1997) 47頁

写真14 『考古学ジャーナル』 No.746, 2020, 25頁

写真15 岩国市教育委員会・櫻木晋一撮影

写真16 昭和女子大学国際文化研究所紀要『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究』 Vol.12, 2008

図1 平尾良光ほか編『大航海時代の日本と金属交易』（思文閣出版 2014）61頁

図2・3・4 鈴木公雄 1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会

図5 櫻木晋一作成

図6 櫻木晋一 1992「北九州市八幡西区本城出土の備蓄銭」『古文化談叢』第27集 39頁

図7 三宅俊彦作成

図8・9 国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史—』（1997）47頁

図10 櫻木晋一作成